

《追悼文》

繁田正子先生の逝去を悼む

北山武田病院 名誉院長、禁煙センター長
NPO 法人日本禁煙学会 理事、NPO 法人京都禁煙推進研究会 理事

栗岡成人

繁田正子先生が2014年3月6日に永眠されました。享年57歳。ほんとうに悲しく、さびしくて、残念でなりません。先生が亡くなられてもう1か月が経とうとしていますが、まだ信じられない気持ちです。

ご本人の強い遺志により葬儀は去る3月10日にご家族のみで執り行われました。長年の盟友であり、京都禁煙推進研究会事務局長で僧医の田中善紹先生が葬儀の導師を務められました。

先生は1981年京都府立医科大学を卒業され、第一内科および関連病院で呼吸器病学の臨床研修・研鑽を積まれました。その後1995年より京都第一赤十字病院健診部医長として赴任され、2003年に健診部部長となりました。2007年には大学に戻られ、地域保健医療疫学教室の助教、講師として研究と後進の指導・教育に当たられました。そして2011年4月より南丹保健所長と京都府立医科大学准教授を兼務され、地域の中でタバコフリー活動を続けられました。

1998年5月、繁田先生、田中善紹先生はじめ京都で禁煙に取り組んでいた11人の「志士」により京都禁煙推進研究会が発足しました。一人で細々と禁煙支援をしていた私は、京都にも仲間がいることに大いに勇気づけられ、早速入会しました。その当時、先生は京都第一赤十字病院の健診部で人間ドック受診者を相手に精力的に禁煙支援に携わっておられました。

そして、研究会が主催する世界禁煙デーイベントや禁煙指導講習会に参加するうちに、繁田先生の人を惹きつける力、巻き込む力、抜群の言語感覚にいつも感嘆させられ、舌を巻いていました。そして、元気印の先生にいつも励まされていました。繁田節と呼ばれる、その語り口は聞く人にやさしく、わかりやすく、しかも心を動かすものでした。また先生の書かれる文章には、その思いが行間に



図1 光の中の繁田先生

もあふれ出ていて、説得力のあるものでした。

繁田先生が遺されたタバコ関連の文献、資料、パンフレット、教材などは数知れませんが、なかでも先生が開発された「卒煙あいうえお」は、広く活用されています。「卒煙あいうえお」は単なる語呂合わせではなく、エビデンスに基づいた科学的卒煙法であることをいつも強調されていました。

先生が2001年、京都の北部、周山ではじめられた体験型防煙授業は、タバコフリーキャラバンと名付けられ、医学生や看護学生を引き連れ、大きな荷物を抱えて、京都府下は言うに及ばず、全国を「繁田一座」がかけ巡ってきました。

あまりに忙しいためか、少し抜けたところもあって、楽しいエピソードは数知れません。その結果、ちょっと困ったことになっても、みんなには「繁田先生やししゃーないか」と思わせてしまうところもありました。

タバコフリーキャラバンは多くの方々のご協力により、燎原の火のように京都府下に広がり、2013年度には、京都府内で小、中、高、特別支援学校合わせて96回、看護学校や大学、府外の大阪や兵庫への授業も合わせると118回の授業を行い、対象生徒・学生数は約2万人という大事業に発展し

ています。

その集大成が、2011年11月のタバコフリーキャラバンin国会でした。小宮山厚生労働大臣(当時)に対する激しいバッシングに対し、先生の火の玉のような情熱により全国23の禁煙推進団体が連携し、国会に集結したことは、タバコフリー活動の歴史にも特筆されるべき出来事でした。

Act locally! Think globally! Move on nationally! の言葉は今も生きています。

しかし、その頃すでに先生の体の中に、病魔が宿っていたのです。2012年正月明けに手術を受けられ、病状が容易ならざるものと知らされました。それからの2年は厳しい闘病生活の中、死と向き合いながらタバコフリー活動に貴重な時間を割かれてきました。私はその姿をハラハラ、おろおろしながら見守ることしかできませんでした。思い出すとまた涙があふれてきます。

2012年5月のタバコフリーシンポジウム in Kyotoでは強力な化学療法で骨髄がスカスカになるほどの体で、未来を担う子供たちが3万5千筆あまりの署名を京都府知事に手渡す姿を見届けられました。

木下陽子さんの参議院選出馬の際には、人々にタバコの真実を訴える絶好の機会と、自ら進んで参謀として演説原稿を練り、またビラ貼りをしたり、街頭宣伝車にも乗られるなど全精力を傾けられました。

一時は参加も危ぶまれていたAPACT2013にも参加され、日本、アジア太平洋のユースと交歓をされました。タバコ産業と企業の社会的責任のシ



図2 APACT2013での繁田先生と若者たち

ンポジウムで発表された後の、ホッとされた満足そうな顔が今も目に浮かびます。

昨秋には食事が入らなくなり、TPNで自宅療養されていましたが、そんな中でも私たちを励まし、勇気づけるご意見やご助言を頂きました。入院のベッドのなかでも、最期までタバコフリー活動の行く末を気にされていました。そして今年5月の世界禁煙デーイベントの素晴らしい企画にとっても喜んでおられました。

先生は一粒の麦になられました。その身をタバコフリー活動に捧げることで、多くの人々に大きな影響を与えられました。一粒の麦は地に還ることにより、これから様々な土地でタバコフリーの花を開き、豊かな実をつけることでしょう。

先生、安らかに眠りください。いつの日かタバコフリーの世界でまた会えると信じています。